公益財団法人国際文化フォーラム

2018 年度　事業報告及び附属明細書

TJF

以下、主要事業のポイントをご報告します。2018 年度の各事業の報告は、6～15 ページに掲載しています。

【ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業】

◆探究的・対話的な学びの実践と体験

・1年間の実践を分析・再設計して新学年に備える　ア―2―①

毎年 3 月に行っている稲垣忠東北学院大学教授によるワークショップは、それぞれが1年間実施してきた探究的な学びの質を、学習活動カードやその他のツールをつかって多角的に分析、検証したあと、新学年に向けてブラッシュアップした単元案を完成させます。2018 年度は、リピーターが 2 割、過去の参加者からの紹介など口コミによる参加者が 3.5 割と、一定の評価を得ました。今後、講師もまじえ、オンラインでその後の実践や課題の共有、ディスカッションなどのフォローアップを行っていく予定です。

・「本の魅力を一行で伝える」広告コピーをつくる　ア―2―③、ア―3―①

多忙な教師が生徒と同じ立場で探究的な学びを体験するプログラムとして継続してきた CM づくりワークショップを、3 年ぶりに生徒向けにも実施しました。これまでは学校紹介 CM などの映像制作が主でしたが、今回は、中高校生が自分で選んだ本やマンガの魅力を徹底的に深掘りして一行コピーとキャッチコピーを考え、ポスターを創る活動を行いました。全体を通して CM プランナーが実際に行っている思考・創造のプロセスを疑似体験する仕組みになっています。途中、アイディアに行き詰まり、頭を抱える中学1年生もいましたが、同じグループの高校生が自然と聞き役になって励まし、全員が 1 日で作品を完成させました。

・アート作品を味わう。コトバにする。コトバをきく。カタチにする。　ア―2―④、ア―3―②

Visual Thinking Curriculum をもとにした対話型鑑賞プログラムを、教師向け、中高校生向けに初めて実施し、新学習指導要領でも重視されている対話的な学びを体験してもらいました。アンリ・ルソーやゴッホなどの作品を題材に、絵の中になにが描かれているかつぶさに観察し、発見した「事実」を出しあい、そこからなにを感じるか、どう解釈するか対話を積み重ね、作者の意図を推論したり、作品の世界観を考えたりしました。その過程で、事実と解釈を区別することを学び、ものをみるさまざまな視点を互いの発言から獲得していきます。

中高校生向けのプログラムでは、作品を鑑賞するだけでなく、対話型鑑賞が自分にとってどんな体験だったかを粘土や写真など非言語の媒体で表現し、完成した制作物をみんなで鑑賞しました。静岡から参加した高校生は、黙っているのではなく、自分の考えをことばにして伝えることで、ほかの人から違う視点をもらうこともでき、自分の考えが変わったり、磨かれていったりすると気づいたそうです。

教師向けプログラムの意見交換では、「自分の考えを言うのは勇気がいる。ほかの人がうなずくだけで安心した」「ことばにできないモヤモヤを体験したが、時間をかけて消化、熟成されていくことにも意味がある」など、自身の生徒を思い浮かべながら体験をふりかえる発言が多くみられました。また、教師はどのような問いかけをすればいいか、対話的な学びの集約をすべきかなど、授業に取り入れることを前提に活発な議論も行われました。

◆ことばを学ぶ必然性を感じる活動づくり　ア―4

2018 年度より英語以外の外国語科目を設置している学校と協力して、その学校の生徒を対象にしたオリエンテーションプログラムを提供し始めました。初めての試みとして、2 年次にグローバルランゲージとして 5 つの外国語が設定されている東京都立王子総合高等学校の1年次全生徒 237 名に、ことばが必要になる活動をそれぞれ 2 つずつ体験してもらいました。

フランス語：ボードゲーム Dixit、スペイン語：FC バルセロナの紹介とサッカーボ

ールを使った活動、中国語：卓球、ドイツ語：ドイツ語を使ったクイズやゲーム、韓国語：K-POP の紹介とダンス

事後アンケートでは、ほとんどの生徒が言語選択の参考にしたと答えました。

【イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業】

◆記事づくりで社会とつながる学びを体験　イー１

学生がテーマを決めて、そのテーマに関わる人たちにインタビューをして記事を作成する活動からなるときめき取材記プロジェクト。2018 年度は、武蔵野美術大学、群馬県立女子大学、横浜国立大学、大阪大学、ニュージーランド・カンタベリー大学で日本事情や日本語の授業を担当する先生たちとプロジェクトを進めました。

大阪大学の学生は、2018 年に大阪北部地震や台風 21 号という大きな災害を経験したことから、どのような備えが必要なのかを知るために、「防災」をテーマに選びました。防災をさまざまな角度からとらえ、アーティスト、料理研究家などに話を聞き記事を作成しました。プロジェクトに取り組んだ学生は、日本は災害が多く、自分の身を守るために防災対策は欠かせない。防災の知識があれば、災害時に自分たちにとって大きな助けになると強く感じたと語っています。

◆日本語の授業で制服のデザインにチャレンジ　イー３

2018 年度は、大連教育学院と「わたしたちの学校の制服をデザインしよう」プロジェクトを実施しました。プロジェクトには、大連市内の中高校と好朋友日本文化体験の場があるハルビン、大連、上海、中山の学校が参加しました。

5 月に大連で実施した教師研修で、制服のデザインの作成とプレゼンをゴールにした日本語の授業を実施するために必要な理論、制服デザインに必要な知識、テーマベースの日本語の授業デザインを学びました。最終的に 11 月の発表会では、計 15 組の生徒たちが、自分たちがデザインした制服について発表しました。

取り組んだ教師からは、日本語の授業だけでなく、美術や技術担当の教師から大きな協力を得るなど、教科横断的な学習につながった、制服をデザインするという目的をもって日本語の文法や単語を学習することの効果があったと報告がありました。参加した生徒たちからは、自身の日本語力が向上しただけでなく、チームワークを高めることができた、との感想が寄せられました。

【ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業】

◆真剣に取り組める場をデザインする　ウー１

7 回目となる「ソウルでダンス・ダンス・ダンス」を、8 月にソウルで実施しました。今回は、ダンスの練習を含めプログラムに真剣に取り組める場をデザインすることを心がけました。その一つが、共催者である秀林文化財団が所有する金熙秀記念秀林アートセンターを発表会の会場にしたことです。初日のオリエンテーション後、ライトに照らされたステージを見た瞬間、参加者からどよめきがおこりました。2 日目以降のダンスの練習に対する真剣味がましました。

参加した生徒は、ダンスの練習や発表の準備などで葛藤に直面したことはあったものの、仲間と協力してそれを乗り越え、出会った仲間たちをかけがえのないものだと感じていました。

◆大人の交流が子供の交流を実現させる　ウー２

4 年めとなる 2018 年度は、日本の校長の韓国派遣、韓国の校長の日本招聘を一つのプログラムと考え、いずれも TJF が共催・協力機関とともに実施しました。8 月に実施した派遣プログラムは計 10 校より 14 名の参加が、11 月の招聘プログラムは、校長及び教員 19 名の参加がありました。

高校生の交流を実現させるためには、まずリーダーである校長先生が交流の実体験をもつことが効果的である考え、プログラムの期間中にそれぞれ高校生、留学生、校長や教員などさまざまな人と出会うようにしました。その結果、複数の韓国の

先生から日本の先生に学校間交流へのアプローチがあったり、自分の学校の教師10名を連れて来日した校長もいました。

◆年間の授業の中で交流を位置づける　ウー３

日本の高校ロシア語教師とロシアの初中等日本語教師9ペアが、4月から一年かけて、言語学習、文化理解、相互交流を融合した交流学習プロジェクトに取組みました。11月にはサンクトペテルブルクで日露の教師が参加する中間報告会を実施し、アドバイザーである、早稲田大学日本語教育研究センター准教授の金孝卿氏からコメントをもらったり、プロジェクトメンバー間で相互評価を行い、プランの振り返りと改善を行いました。3 月末にオンラインのかたちで行った最終報告会には、プロジェクトメンバーに加え、交流学習に関心をもつ一般参加者 21 名が参加しました。

1 年間の取り組みを終えて、年間計画での交流の位置づけをもう少し明確にしたほうがよい、日露でプロジェクトの目標を調整する必要があると感じたなど、課題も挙がりましたが、プロジェクトに参加した先生方は、いずれも交流学習を続けていきたいという意向を示しました。

◆参加者同士でことばや文化を尊重する　ウ-4

日本を含め 7 地域にルーツを持つ高校生計 31 名が参加する、2 回めとなる多言語・多文化パフォーマンス合宿が、3 泊 4 日の日程で大学セミナーハウス（東京都八王子市）を会場に行われました。合宿期間中は、演劇ワークショップを通じて交流を図りました。今回は、参加者それぞれの言語と文化を知り、お互いに尊重できるよう、母語を使ったワークを組み込んだり、参加者のルーツ地域のお菓子を揃えたり、多言語絵本を会場に展示したりしました。また、昨年度の参加者を中心に 4 名のサポーターに参加してらうことで、より参加者に近い目線でフォローしてもらうことができ、プログラムがスムーズに進みました。

最終日に合宿の成果として行ったパフォーマンス発表会には、参加生徒の家族、推薦した学習支援機関や学校の教師やコーディネーターなど、計 34 名が見学に訪れました。

【エ. 広報事業】

◆プログラムをわかりやすく伝える　エー１

2018 年度の事業報告書『CoReCa』は、専用のアプリを使って 6 つの事業を動画で見られるようにしました。文章だけでは伝えられない参加者の声のトーンや会場の雰囲気、活動でのやりとりの一端を読者に感じ取ってもらえるようにするためです。また、前年度の事業の報告に各プログラムの概要の説明を加え、パンフレットとして複数年使えるような工夫もしました。財団概要は、日本語のほか、韓国語、中国語、ロシア語版を作成し、交流事業に関係する現地関係者に配付しました。

ウェブサイトについては、スマホ対応と、多言語（英、中、韓、露）での展開を意識したリニューアル作業を進めました。

2018 年度に実施した事業の一覧

ア.　国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業

1.「外国語学習のめやす」活用の促進をめざしたワークショップの開催
2. 社会変化に対応し学びをデザインする教師研修の実施
3. 「学校のソトでうでだめし」プロジェクトの実施
4. 「りんごをかじろう」講座の実施
5. ネットワークの構築と情報収集

イ.　ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業

1. 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の運営
2.「外国語学習のめやす」活用の促進をめざしたウェブサイトの運営
3. 中国への図書・教材・資料の提供
4. ネットワークの構築と情報収集

ウ.　互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業

1. 日韓・中高生の交流プログラムの実施
2. 日韓の校長交流プログラムの実施
3. 日露教師・生徒交流プログラムの実施
4. 多言語・多文化交流＜パフォーマンス合宿＞の実施
5. ネットワークの構築と情報収集

エ.　広報事業

1. TJF の事業の広報
2. ネットワークの構築と情報収集

		実施時期	実施場所	事業内容	関係機関/団体
公1　国内外の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促進するとともに、教育及び文化の交流を推進する事業 124,103,652円（内、公益目的事業共通費用 71,208,743円　※）					
ア.　国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業（予算額：13,477,536円／実績額：8,775,980円／予算残額：4,701,556円）					
1	「外国語学習のめやす」 活用の促進をめざした　ワークショップの開催 予算額：1,409,650円 実績額：381,082円 予算残額：1,028,568円 費用減少理由：予定していた海外でのWSを実施しなかったため	①2/25、 ②3/8	①、②とも 大阪	めやすマスターティーチャー企画の研修 2018年度は「外国語学習のめやす」マスター研修修了者（Let's　めやす）との共催で以下のワークショップ等を国内で実施した。 ①「めやす」目標分解ワークショップ（大阪/21名） 「めやす」が推奨しているプロジェクト型学習の逆向き設計をするにあたって、大目標、中目標、小目標、タスクの順に分解していく「目標分解表」を開発した山崎直樹氏（関西大学教授）を講師に迎え、目標設定、評価活動、授業プランの3点セットで参加者にワークをしてもらった。 ②CEFR×「めやす」ワークショップ（大阪、オンライン/計35名） 制作過程でCEFRも参照した「めやす」。社会とのつながりの中で言語学習を行うという根底理念が共通している。長年ドイツで教鞭を執られ、CEFRを深く研究してこられた奥村三菜子氏を講師に迎え、CEFRとの比較において「めやす」を捉えなおし、授業づくりに生かす方法についてワークを行った。会場とオンラインいずれでも参加できるハイブリッド型研修とした。 2019年度は、大連理工大学の要請により、高校大学の日本語教師を対象としたワークショップを共催する予定になっている。	①、②　共催Let's めやす

2	社会変化に対応し学びをデザインする教師研修の実施 予算額:4,467,684円 実績額:2,419,493円 予算残額:2,048,191円 費用減少理由:米国からの講師招聘が2回から1回に、北海道での外国語教員研修が4回から1回の実施になったため	①2019年3月 ②8月 ③5月、6月 ④3月	①東京 ②大阪、沖縄、北海道 ③大阪 ④東京	おもに探究学習やプロジェクト学習の授業デザインと評価に焦点をあて、先生方の実践に役立つことを重視したプログラムを実施してきました。 ①探究する学びを分析・デザインするワークショップ(小中高校教員向け) 探究学習やプロジェクト学習をデザインするワークショップの第5回め。北海道から沖縄までの各地のほかコロンビアから小中高校の教師25名が参加した。参加者それぞれが持ち寄った探究学習の実践のプロセスを、児童・生徒の目線になってシミュレーションしなおした後、思考と表現に観点をしぼったルーブリックをつくりながら、単元としての質を高め、児童・生徒が探究を進める際の支えとなるスキルはなにかを明らかにした。最後に、次年度に向けて、単元をデザインしなおした。作成したルーブリックと単元は、講師の稲垣忠東北学院大学教授が運営し、約1000件の事例が登録されているRublic Bankに追加され、今回の参加者に限らず、教育関係者に広く共有されている。2019年度にオンラインなどを使って、参加者のその後の実践や新たな課題について共有、議論するフォローアップを行うとともに、この研修がどのようにいかされていくのか検証する機会をつくる予定である。 ②評価をテーマにした講義、ワークショップ(小中高校の教員向け) 當作靖彦カリフォルニア大学教授に講師を依頼し、おもに評価に焦点をあてた講義とワークショップを実施した。6年連続で沖縄県教育委員会と共同開催した研修には、県内の公立高校全60校から各1名ずつ外国語担当教員が参加し、「プロチーブメントテストの理論と実践:効果的なパフォーマンス評価」をテーマに、評価活動やルーブリックづくりに取り組んだ。3年計画で実施してきた豊中市教育委員会主催の研修は最終年度を迎え、豊中市の小中高校教員60名が参加し、新しい学力観の解説とともにその評価方法について講義が行われた。また、北海道の公立高校の英語教員約20名を対象に、「21世紀の言語教育の新しい方向性 ツールとしての言語教育から地球市民育成の言語教育へ」と題した講演を行なったのち、昨年の研修参加者が1年間の実践について報告した。	①共催:学びの質ルーブリック研究プロジェクト、助成:JSPS 科研費 16K01123 協力:一般社団法人iOSコンソーシアム ②共催、協力:沖縄県教育委員会、豊中市教育委員会

2				③「伝えたいこと」を深く掘ってCMをつくる（小中高校の教員向け） 教員向けのCMづくりワークショップは5回めを迎え、初めて大阪で実施した。授業や課外で、プレゼンや発表、発信を目的とした制作・創作活動を取入れるときに、児童・生徒が「伝えたいことの本質にたどりつくまで考えぬく」「伝えたいことの本質を捉えながら、伝えたい相手の目線に立って　伝わる表現を徹底的に追求する」プロセスをつくるヒントを得てもらうことを目的としている。また、ワークを通して、自身の教育活動の軸をふりかえったり、周囲にめざしたいことの趣旨を効果的に伝え、協力者を増やしていくための実践力を磨く機会にもなっている。CMプランナーの講師が各参加者にていねいにフィードバックできるよう6人前後を適正人数としているが、今回は、大阪、岡山、兵庫から中高校の教師、教員志望の大学生など8名が参加した。参加者が制作したCMを実際に学校紹介ビデオとして利用したり、ワークショップの手法を参考にして、生徒が小学生やその保護者向けに学校の魅力を伝える学校CMをつくる授業を行い、完成したCMを学校説明会で上映するといった取り組みにつながっている。 ④対話型鑑賞プログラム「アート作品を味わう。コトバにする。コトバをきく。カタチにする。」（小中高校教員向け） 新学習指導要領で「対話的な学び」が重視されようになったが、多忙な教師が対話や対話的な学びを体験する機会は限られている。対話をとおして、どのような発見や感情、思考がおきてくるのか、教師自身が体感し、授業に取り入れる際のヒントを得てもらおうと、初めて企画した。おもに首都圏から16名が参加し、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターの岡崎大輔副所長を講師・ファシリテーターに迎え、ニューヨーク近代美術館で考案されたVisual Thinking Curriculumをもとに同研究センターが開発したArt Communication Projectを体験。アート作品を鑑賞し、作品から知ることのできる「事実」と、それぞれの印象や想像、意味づけなど「解釈」の違いを意識しながら、その両方をことばにしあい、お互いのことばをきいてまた作品を観察し、さらに気づいたことや感じたことをことばにするということを繰り返しながら、作品・自分・他者との対話を深めた。	

3	「学校のソトでうでだめし」プロジェクトの実施 予算額:2,020,356円 実績額:1,282,872円 予算残額:737,484円 費用減少理由:全3回、延べ9日間を想定していたワークショップが2回2日間になった。また、1回はTJF、もう1回も低価格の会場で実施したため、会場費がほとんど発生しなかった。	①3月 ②3月	①東京 ②東京	中高校生が、日常生活では出会わない他校の生徒や大人といっしょに、学校では体験しないような活動に取り組むことで、新しい視点を得たり、自分の多様な面を発見したり、多様な人たちとの関わりかたを自分なりにみつけていくきっかけとなることをめざしている。 ①本の魅力を一行で伝える 神奈川、埼玉、千葉、東京の中学1年生から高校2年生まで8名が参加し、1日かけて自分が選んだ本やマンガなどの魅力を、自分の決めたターゲットに向けて伝えるためのコピーづくりに取り組みながら、「自分が伝えたいことは、突きつめると、何なのか？」「伝えたいことが、伝えたい人に伝わるために、どう表現すればいいか」を追求した。電通CMプランナーの近藤祐見さんを講師に、広告映像や広告ポスターをみて、どんなターゲットに対してどのような態度変容をおこすために、ことばや映像、写真、絵、ストーリーをどのように工夫してつかっているかをディスカッションしたあと、商品や企業ブランドなどの価値を最大化するための一行コピー(タグライン)と興味をひくためのキャッチコピーの役割の違いについて確認。その後、それぞれが持参した本やマンガの魅力を可能な限り書き出し、そこから伝えたい特徴をひとつにしぼってさらに深掘りして一つの文章に表現。ターゲットを意識して文章を磨きあげ、一行コピーを完成させた。さらに、キャッチコピーをつくり、画像を選んでポスターを制作。最後に完成したポスターを壁に貼りだし、それぞれの作品について感想を述べあい、制作の意図を発表した。このプログラムをきっかけに、アメリカン・スクール・イン・ジャパン上級日本語クラスのメディアリテラシーのコースで、CMワークショップの実施を依頼され、2019年度実施予定。 ②対話型鑑賞プログラム「アート作品を味わう。コトバにする。コトバをきく。カタチにする」 小中高校の教員向けに実施した対話型鑑賞とほぼ同じ内容のプログラムを実施。首都圏、静岡、大阪から8人の中高校生が参加した。中高校生は、対話型鑑賞を体験したあと、対話をとおして自分のなかに湧きあがってきた感覚や鑑賞のプロセスをふりかえって感じることを、粘土や手芸用品、写真など非言語の媒体をつかって表現。完成した自分たちの作品を鑑賞し、作品をみて気づくことや受ける印象などを出し合い、作者がどんな意図で制作したか発表した。	

4	「りんごをかじろう」講座の実施 予算額:1,890,192円 実績額:960,634円 予算残額:929,558円 費用減少理由:オリエンテーション講座は3校で実施予定のところ、1校での実施となった。中高生の親のための隣語講座も今年度の実施はなかったため。	①通年 ②9月 ③11月 ④通年	①東京 ②東京 ③東京 ④東京	①2010年から実施している「中高生のための韓国語講座」を駐日韓国文化院世宗学堂と共催したほか、拓殖大学第一高等学校韓国語講座にも継続して協力した。 ②オリエンテーション講座 都立王子総合高校の1学年237人を対象に、次年度開設予定の5つの外国語講座(中、韓、西、独、仏)の中から選択履修するのためのきっかけづくりを行った。結果、ほとんどの生徒が 本講座を言語選択の参考にしたという結果があきらかになった。 ③一般を対象とした「りんごをかじろう」講座 インドで仏教の僧侶として出家した草薙龍瞬氏を講師に招き、「心を健康にする瞑想法とだれも知らないインドの話」を実施した。 ④隣語としての日本語プログラムの開発 海外から来日するひとと日本語で交流することを促すツールとして、オノマトペのカードゲーム(試行版)を開発した。	①の「中高生のための韓国語講座」共催:駐日韓国大使館韓国文化院 ②協力:アンスティチュ・フランセ東京、ゲーテ・インスティトゥート東京、東京韓国教育院、FCバルセロナアカデミー葛飾校
5	ネットワークの構築と情報収集 予算額:3,689,654円 実績額:3,731,899円 予算残額:△42,245円	通年	各地	アの事業に関連する国内外の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。 また、スタッフが学ぶ機会として、複数回の勉強会を開催した。	

イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業　（予算額：12,975,394円／実績額：9,319,441円／予算残額：3,655,953円）					
1	日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の運営 予算額：4,844,254円 実績額：2,602,392円 予算残額：2,241,862円 費用減少理由：くりっくにっぽんの記事の更新ができなかったため取材費、翻訳料がかからなかったこと、中国向け広報手段であるSNS微博を前半で休止したため	通年	TJFウェブサイト	①くりっくにっぽん 昨年度に引き続き、韓国のオンライン教師ネットワーク・JTA（会員2,000名）の協力を得て、JTAサイトにMy Way Your Wayの記事を掲載。また英語圏日本語教師向けのメルマガ「Click Nippon News」を月に1回配信し（読者は約1,300名）、「くりっくにっぽん」「ときめき取材記」のコンテンツを活用した日本語の学習活動のヒントを紹介した。中国向けには中国語版SNS・微博「点击日本」で発信していたが、本来の目的であるくりっくにっぽんの広報の効果がないため9月末をもって休止した。My Way Your Way、編集部Logのコンテンツを更新する予定だったができなかった。 ②ときめき取材記 2018年度は、大阪大学、群馬県立女子大学、武蔵野美術大学、横浜国立大学、ニュージーランド・カンタベリー大学の「日本語」「日本事情」の授業で取り組まれ、年度内に8本の記事を新規掲載した。また、2017年度に「ときめき取材記」プロジェクトに取り組んだ教師5名と振り返りと資料などの検討を行い（8月、神奈川、1泊2日）、プロジェクトを深めるために何をすべきかを議論した。	①サイト運営・広報 協力：韓国日本語教師ネットワーク（JTA）
2	「外国語学習のめやす」 活用の促進をめざした ウェブサイトの運営 予算額：560,000円 実績額：15,011円 予算残額：544,989円 費用減少理由：今年度はウェブサイトの改訂を実施しなかったため	通年	TJFウェブサイト	めやすを使った実践報告や授業プラン3本を追加掲載した。いずれも日本語教育での実践で、そのうちの1本は「めやす」マスターが、他2本は「めやす」ますアターが企画する研修やワークショップの参加者が作成したものである。本ウェブサイトは、「めやす」マスターが主体的に企画実施する研修の成果をより多くの人に共有する場となっている。	

3	中国への図書・教材・資料の提供 予算額:5,770,740円 実績額:5,375,152円 予算残額:395,588円 費用減少理由:11月の発表会に派遣する人数が減ったため	①6月-11月 ②通年 ③通年	①大連 ②ハルビン、大連、上海、広州 、中山③中国各地	①「わたしたちの学校の制服をデザインしよう」プロジェクト TJFは大連教育学院と共同で大連市内の中高校と②にある好朋友日本文化体験の場のある5つの学校を対象に「わたしたちの学校の制服をデザインしよう」プロジェクトを実施した。5月に教師研修を実施し、制服をデザインし発表することをゴールとする日本語の授業について理論と実践面から学び、その後各学校の日本語の授業で生徒たちが制服のデザインに取り組んだ。11月に大連で開催した発表会には、大連市内の中学校17組中10組、高校13組中3組の予備審査を通過した生徒たちに加え、好朋友日本文化体験の場がある上海と中山の学校の生徒各1組、計15組の生徒たちが参加し、地域の特色、校風や学生らしさ、自分たちの文化などを考慮して作成したデザインを披露した。 ②好朋友日本文化体験の場へのサポート 5つの好朋友日本文化体験の場に対し、追加の教材や資料を寄贈するとともに、それぞれが企画する活動に現地の日本人が参加できるようサポートを行った。 ③講談社より提供していただいた図書を、(公財)日本科学協会を通じて、日本語科があり日本語学習者数の多い24大学に計10,686冊寄贈した。	①共催:大連教育学院 ①②助成:(公財)三菱UFJ国際財団
4	ネットワークの構築と情報収集 予算額:1,800,400円 実績額:1,326,886円 予算残額:473,514円 費用減少理由:学会、セミナーへの参加が予定より少なかったため			イの事業に関連する国内外の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。	

ウ.　互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業　（予算額：18,852,124円／実績額：22,281,410円／予算残額：▲3,429,286円）					
1	日韓・中高生の交流プログラムの実施 予算額：5,374,194円 実績額：6,660,641円 予算残額：△1,286,447円 費用増加理由：当初の計画にはなかった写真展の開催とプログラムの動画製作をおこなったため。	8月6-11日	韓国・ソウル市	日本で韓国語を学ぶ中高校生と韓国で日本語を学ぶ中高校生の交流プログラムの第7回を実施し、日韓ともに選考に通った全国の中高校生を各20名計40名が参加した。発表会場を共催団体の秀林文化財団が所有する金熙秀記念秀林アートセンターとすることで、、プロダンサーも公演を行う本格的なステージで参加者の真剣な取組みを促すことができた。また、同会場のギャラリーを利用し、過去6年間の記録写真の展覧会を同時開催した。 発表は、各チームが7分の間に、それぞれ考えた方法・構成でダンスの披露とチーム紹介を行い、来場した約60名を超えるゲストが6チームの中から、最も魅力を感じたチームに投票し優勝チームを決めた。	企画・共催：(財)秀林文化財団 共同実施：秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会 助成：日韓文化交流基金 後援：国際交流基金ソウル日本文化センター 協力：高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク 輸送協力：ANA 旅行取扱：ジェイエッチシー
2	日韓の校長交流プログラムの実施 予算額：3,106,180円 実績額：4,869,201円 予算残額：△1,763,021円 予算増加理由：招聘プログラムは、当初予定していたJENESYSの公募は、青少年対象のため応募せず、TJF独自の事業として実施したため	①8月4-7日 ②11月21-24	①韓国・ソウル市 ②東京	①日本の校長の韓国派遣プログラム 東京と神奈川の韓国教育院と共催で日本の高校の管理職を韓国（ソウル）に派遣するプログラムの4回めを実施し、東京、神奈川、埼玉、千葉、岡山、大阪から10校から計14名の参加があった。ソウル滞在中は、日本語教育実施校を訪問し日本語学習者と交流したり、ソウルに留学中の日本の学生と交流したほか、国際交流基金ソウル日本文化センターと共催の「日韓校長及び教師交流会」で、日本語を開設する学校11校の管理職と日本語教師計23名と互いの言語を学ぶ意義を再確認し今後の学校間交流の可能性を検討した。 ②韓国の校長の日本招聘プログラム 先に実施した日本の高校の校長韓国派遣プログラムの「日韓校長及び教師交流会」に参加した韓国の高校校長および日本語教師等19名を東京に招聘し、日本の高校で韓国語を学ぶ高校生、韓国から日本に留学中の大学生等、そして8月に一度交流した日本の高校校長他教員らと二度目の交流を行った。 二度の交流会を契機に、韓国の複数の高校の日本の学校訪問の企画が進められている。	共催：東京韓国教育院、神奈川韓国綜合教育院、国際交流基金ソウル日本文化センター（一部共催） 助成：韓国国際交流財団 輸送協力：ANA

3	日露教師・生徒交流プログラムの実施 予算額:5,155,740円 実績額:5,420,614円 予算残額:△264,874円 予算増加理由:出張人数が予定より多くなったため	通年	①日本各地、②ロシア各地	①日露交流学習プロジェクト 日本の高校ロシア語教師とロシアの初中等日本語教師9ペアが、2018.4.1～2019.3.31の一年間かけて、言語学習、文化理解、相互交流を融合した交流学習プロジェクトに取組んでもらった。プロジェクトのアドバイザーにキムヒョギョン氏(早稲田大学日本語教育研究センター准教授)に就任してもらい、プランの作成、実施、中間報告、改善、最終報告の5段階を踏み、各段階において、ファシリテート、フィードバックをしてもらった。 中間報告会に合せて、2018年11月1日～6日の日程でアドバイザーと日本側メンバー6名をサンクトペテルブルクに派遣し、現地でロシア側メンバーと合流して報告会をおこなった。日露のメンバー、市内教師を合わせて43名の参加を得た。翌日、日露メンバーと市内教師を合せて33名が参加する合同研修会も行った。3日めは日露メンバーで会合を行い、振返りをし、改善に向けて話し合った。 最終報告会は2019年3月31日にオンラインで行い、日本とロシアのほか、オーストラリア、ハンガリーからのお申込みもあり、合せて21名の一般参加があり、日露メンバー18名全員が報告をおこなった後、各取り組みに対するコメントや質疑応答が行われた。今後、9ペアの実践を報告書にまとめる公開することで、交流学習プロジェクトに関心のある人たちと共有したい。 ②図書寄贈 日露交流学習プロジェクト参加校を中心に、5校に対して137点の教材・教具を寄贈した。各校のリクエストにより、日本文化理解に役立つグッズを中心となった。	助成:(一社)尚友倶楽部
4	多言語・多文化交流＜パフォーマンス＞合宿の実施 予算額:3,616,010円 実績額:4,232,128円 予算残額:△616,118円 費用増加理由:ポスター作成、動画とスチール撮影に対する謝金が計画を超えたため	2019年3月25日-28日	東京	日本とほか7地域にルーツを持つ高校生計31名が参加し、3泊4日の日程で大学セミナーハウス(東京都八王子市)で合宿を行い、演劇ワークショップを通じて交流を図った。演出家、舞台監督、俳優、ダンサー、通訳者からなるファシリテーターチームと、2017年度の合宿参加者を中心とする4人の学生サポーターチームの協力を得て実施した。今回は参加生徒の持つ言語的、文化的背景の「見える化」を実現するため、母語を使ったワークを組み込んだり、参加者のルーツ地域のお菓子を揃えたり、多言語絵本を会場に展示して閲覧してもらったのが特徴であった。最終日に合宿の成果としてパフォーマンス発表を行い、参加生徒のご家族、推薦した学習支援機関や学校の教師・コーディネーターの方、計34名が見学に訪れた。	

5	ネットワークの構築と情報収集 予算額:1,600,000円 実績額:1,098,826円 予算残額:501,174円 費用減少理由:ネットワーク構築のための会合が予定より少なかったため			ウの事業に関連する国内の研究会や会合等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集とTJF事業の広報に努めた。	
エ. 広報事業 （予算額:4,602,028円／実績額:12,518,078円／予算残額:▲7,916,050円）					
1	TJFの事業の広報 予算額:4,122,028円 実績額:11,718,149円 予算残額:△7,596,121円 費用増加理由:CoReCaのページ数を大幅増加、プログラムパンフレットや財団の多言語パンフレットを作成したこと、またWEB改訂の作業がが当初の予定より多くなったため	①B5判、カラー、68ページ 5,500部 ②11-12月、A3四つ折り、100～200部 ③通年	TJFサイト、メールマガジン、東京ほか	①事業報告の作成 30周年事業の総決算として例年とは違う体裁で作成。2017年度に実施した各プログラムのページを取り外してパンフレットとして使えるような仕様にした。 ②多言語パンフレットの作成3 財団とおもなプログラムを紹介するパンフレットを英語・中国語・韓国語・ロシア語で作成。さらに、4言語それぞれに関連するプログラムのパンフレットも作成した。 ③財団のWEBリニューアル サイトアクセス解析の結果を踏まえ、スマホ対応のWEBサイトの作成作業を進めた。同時に多言語（英語、中国語、韓国語、ロシア語）のウェブサイト構築に向けての準備を進めた。 ②デジタル媒体を使った広報 財団の活動を紹介、参加者の募集を行うメルマガ「わやわや」を月に1度配信した。「んじゃめな」「Oh My Gochi」シリーズを前半で終了し、後半は「事業の報告」を毎月掲載し、各プログラムの広報に力を入れた。	
2	ネットワークの構築と情報収集 予算額:480,000円 実績額:799,929円 予算残額:△319,929円 費用増加理由:30周年誌発送費用の一部を計上したため	通年		エの事業に関連するセミナー等に参加し、ネットワークを広げるとともに、情報収集を行い、広報事業の充実につなげる。	

※公益目的事業に係る費用（給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など）